

第 26 回考古資料展

伊勢原の遺跡

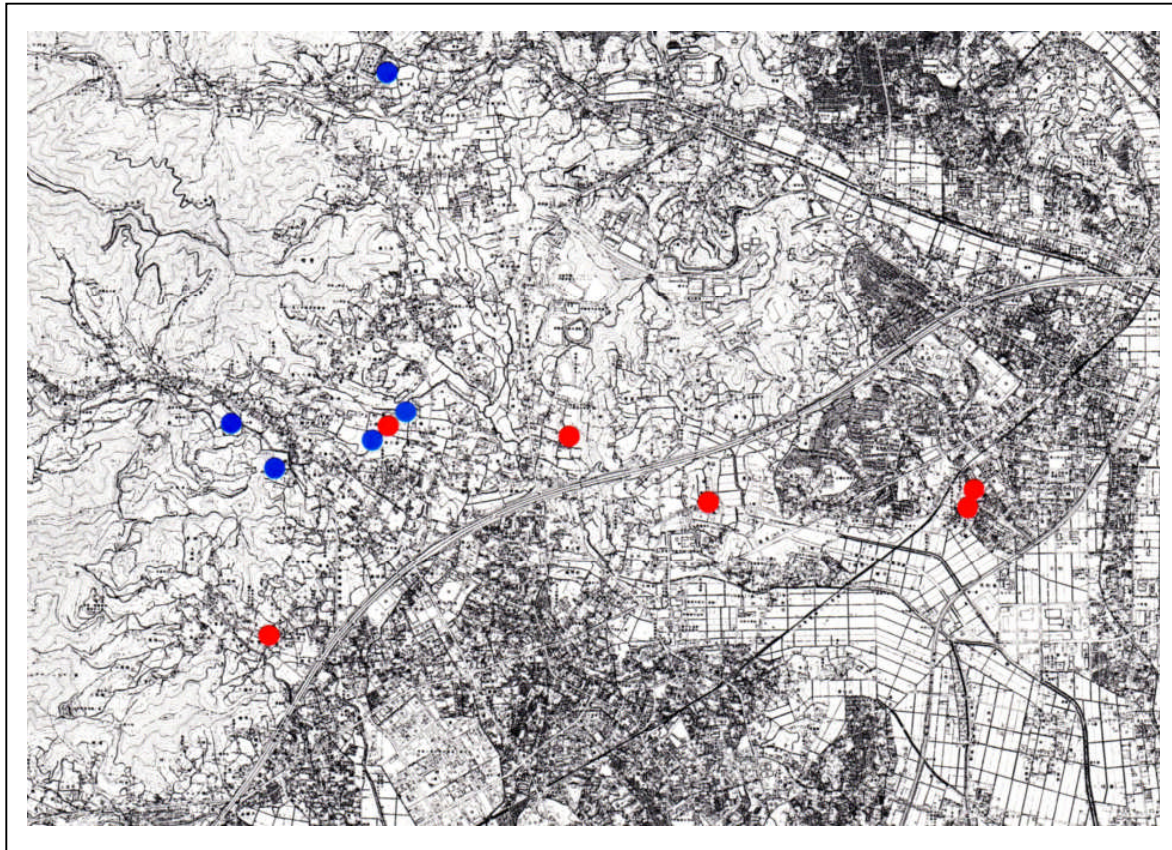
—最近の調査でわかったこと！！—



平成 25 年 2 月 22 日～24 日

伊勢原市教育委員会

共催 公益財団法人かながわ考古学財団



- | | |
|-------------------|------------------------|
| 【遺跡概要】 1 西富岡・向畑遺跡 | 2 伊勢原市No.71・165 遺跡(粟窪) |
| 3 神成松遺跡第2地点 | 4 三ノ宮・前畑遺跡第2地点 |
| 5 高森・宮ノ越遺跡第3地点 | 6 高森・寺ノ下遺跡 |
| 【調査速報】 7 下北原遺跡 | 8 神成松遺跡第3地点 |
| 9 上粕屋・秋山上遺跡 | 10 三ノ宮・浄業寺跡 |
| | 11 伊勢原市No.123 遺跡(子易) |

第26回考古資料展「伊勢原の遺跡」展示遺跡位置図

伊勢原市内では毎年数多くの遺跡調査が実施されています。たぶん皆さんの家のすぐ近くでも道路工事や宅地造成、マンション建設などにもなって発掘調査が行われていることと思います。

その発掘現場では、毎日新しい成果が積み上げられています。地中に眠っていたふるさとの歴史がよみがえり、私たちの目の前に姿を現します。発掘調査から何がわかるのか、皆さんの目で確かめてください。

この展示会は、伊勢原市教育委員会と公益財団法人かながわ考古学財団とが共催して企画・実施するものです。

開催にあたり、神奈川県教育委員会、株式会社玉川文化財研究所、株式会社盤古堂、株式会社日本窯業史研究所、有限会社吾妻考古学研究所、株式会社パスコ、大成エンジニアリング株式会社の関係者の方々から御協力を賜りました。厚く感謝いたします。

(伊勢原市教育委員会文化財課)

1 西富岡・向畑遺跡

所在地 伊勢原市西富岡 120 他

調査期間 平成 19 年 4 月 1 日～調査中

調査面積 25,390 m² (終了地区含む)

遺跡の立地 本遺跡は伊勢原市の北部西富岡地区の丘陵地帯に所在しています。地形上は西側を南流する渋田川に、東を南北に連なる富岡丘陵に挟まれた台地上に立地しており、標高 50m 前後の西向きの緩やかな斜面と平坦地になります。

調査の成果 これまでの調査で、富岡丘陵の裾から西に約 100m の位置に埋没谷（土で埋まった谷）が見つかりました。谷は丘陵に沿って南北に続き、谷の幅は約 40m、深さは最も深かった頃には、現在の地表から約 8m もありました。遺跡はこの谷の周囲に広がっており、旧石器時代・縄文時代・古墳時代・古代（奈良・平安時代）・中世・近世の各時代の遺構・遺物が見つかりました。

昨年度から今年度にかけて、埋没谷の最下層で検出された縄文時代木組遺構の最後の調査を行いました。木組遺構は出土した土器片から縄文時代後期（称名寺式～堀之内式期）に造られたもので、割材や丸太を 2 列並行して直線的にならべ、杭などで固定して造られています。長さは約 11.6m、木組内側の幅は約 1.0m、外側の裏込めされた掘り方（設置するための粗掘りの跡）まで含めると広い部分で 2.4m ほどの幅があります。谷底の流水によって形成された落ち込み部分、つまり水が流れていた中に設置されていますが、遺構内部が上流側の谷底よりも低く窪んでおり、川底を掘り下げて使われたようです。上流側の先端は、半円形に杭を並べて外側に石を入れ、上流側の 1 段高い川底が下流側に崩れて来ないように補強しています。木組の内側や

周囲からは割れたクルミやトチの実が多く出土していることから、木組はこれらの処理に使われたものと見られます。また、木組内部からは珍しい赤漆塗りの木製耳栓（耳飾り）が 1 点出土しました。また、木組外側の裏込めからは、磨製石斧の柄や匙状木製品の未製品などが出土しています。

旧石器時代の調査も大きな成果を上げました。埋没谷西側の地区では、L 1 H 相当層（約 2 万年前頃）を中心とした関東ローム層の中から槍先形尖頭器・ナイフ形石器を中心とする約 2,200 点に及ぶ石器群が見つかりました。この中には、剥片（＝フレイク：石器の素材となる石の破片）や石核（＝コア：剥片を割り取る基の石）、碎片（＝チップ：石器を加工する際に飛び散った細かい破片）なども含まれ、ここで石器を作っていたことがわかります。また、周囲からは石焼き料理の跡と言われる礫群や火を焚いた痕跡と見られる 1～2mm の微細な炭化物の集中箇所がいくつか見つかり、旧石器人が狩りの途中、焚き火の周りでキャンプをしながら石器を作っていたことが想像されます。

(公益財団法人 かながわ考古学財団)



1区西縄文時代木組遺構



木組遺構の丸太と杭



木組遺構出土磨製石斧柄



14区槍先形尖頭器出土状況



14区L1H層旧石器時代遺物出土状況

2 伊勢原市No.71・No.165 遺跡

所在地 伊勢原市東富岡地先、栗窪地先

調査期間 平成 22 年 10 月 1 日～調査中

調査面積 8,375 m²(平成 22～24 年)

遺跡の立地 本遺跡は、小田急小田原線伊勢原駅より北方約 2 km の距離にあり、渋田川と歌川に挟まれた標高 35～36m ほどの台地上及びその周辺に立地しています。

調査の成果 調査箇所が多地点 (12 箇所) におよび、遺跡名が未決定のため、各調査区に 1～12 までの番号を付け、1 区、2 区・・・と呼称しています。調査は平成 22・23 年度に 1～6 区を行い、平成 24 年度は 6～12 区を実施しています。

6 区は、台地の南東端に位置しています。ここでは、近世の段切り・溝・土坑墓・土坑、中坑、縄文時代の土坑などの遺構が発見され世の溝・硬化面・土坑、奈良・平安時代の堅穴住居址・掘立柱建物址・柱穴列・堅穴状遺構・土、奈良・平安時代に集落が営まれていたことが明らかとなりました。堅穴住居址は、26 軒検出されました。一辺 2.4～5.4m ほどの大きさで、北壁の一部のみが発見された 1 軒を除きカマドまたはカマドの痕跡が確認されました。また、床下に土坑が掘られている住居が比較的多く確認されたほか、カマドの横や側面の壁にピットが掘られている住居が複数ありました。ピットの内部からは焼土や灰、土器片などが検出されています。掘立柱建物址は、2 間×3 間が主体で、主軸方位は多くが堅穴住居と同様にほぼ南北または東西を示しています。遺物は土師器・須恵器が多数出土したほか、土錘・刀子・砥石等も出土しました。

7 区は、6 区の 100m ほど南東側に位置します。台地の斜面から低地に移行する箇所にあたり、遺構は近世の土坑とピット、奈良・平安時代の土坑とピットが発見されたのみでした。この地はおもに畑地として利用されていたものと思われる。

8 区は、6 区の 150m ほど西側の低地部分に位置しています。ここでは、中世の溝状遺構・土坑、奈良・平安時代の土坑・ピットが発見されました。また、近世・中世の陶磁器類、奈良・平安時代の土師器・須恵器等の遺物が出土していますが、出土量はわずかでした。この地は、奈良・平安時代から中世にかけて一時的に利用されたのみで、それ以前や近世以降には利用されることはなかったようです。

9 区は、8 区の北東側に近接しています。地形は北西から南東へ向かって傾斜していて、調査範囲の 60% 以上は低地でしたが、近世及び中世の遺構が比較的多く発見されました。近世の遺構は、北西側の関東ローム層部分で溝・ピット、南側の低地部分で木杭を伴う溝が検出されました。中世の遺構は、北側に集中しており、生活面が 2 面確認されました。上面では溝・堅穴状遺構・井戸・土坑・ピット、下面では土坑・ピットなどが発見されました。下面で発見された土坑からは、荷駄鞍・下駄・皿といった木製品が出土しています。

10 区は、9 区の 50m ほど南東に位置しています。現在調査中で、これまでに中世の堅穴状遺構・井戸・柱穴などが発見しており、屋敷が営まれていたことが明らかになっています。

11 区は、10 区の 150m ほど東側に位置しています。ここでは、近世及び中世の溝・堅穴状遺構・井戸・土坑・柱穴などが発見されており、10 区と同様に屋敷地として利用されていたことが判明しました。

12 区は 6 区の 250m ほど北に位置し、台地の東側の縁辺部に立地しています。ここでは、近世の道状遺構、奈良・平安時代の堅穴住居址・掘立柱建物址、古墳時代の堅穴住居址が発見されました。古墳時代の堅穴住居は 30m ほど西側に位置する 3 区でも見つかっており、集落が低地の近くまで広がっていたことが判りました。



6区東側奈良・平安時代全景



9区中世土坑遺物出土状況



11区中世～近世全景



12区古墳時代～平安時代全景

3 ^{かみなりまつ}神成松遺跡第2地点

所在地 伊勢原市上粕屋地内

調査期間 平成 23 年 10 月 24 日～平成 24 年 5 月 21 日

調査面積 4,743 m²

遺跡の立地 本遺跡は小田急小田原線伊勢原駅の北西約 3km に位置し、相模の霊峰として有名な大山の東南麓に広がる上粕谷扇状地の一部に立地しています。調査区周辺は、東に向かって傾斜する地形で、調査区西端で標高約 76m、東端では約 67m を測ります。調査区のほぼ中央に市道が走って大きく二分することから、市道の東辺を境に、便宜上調査区を東側と西側の二つに分けて発掘作業を行いました。

調査成果 近世：近世の主な遺構は柵列と土坑墓です。柵列は調査区東西境界部分に位置し、地面を平坦に削平した面と 46 基のピットで構成されています。直線的に並ぶピットは、近世以降と考えられます。土坑墓からは副葬品として銭貨（銅銭・鉄銭）と陶磁器があり、これらの遺物から 18 世紀後半～19 世紀前半と考えられます。

中世：15 世紀の遺構はほとんど発見されませんでした。発見された遺構は 12 世紀後半～13 世紀前半のものが中心でした。その中でも、C1 号掘立柱建物址と C3 号竪穴状遺構は主軸方向が同じで近接していることから、掘立柱建物址と竪穴状遺構が一体となって馬小屋として機能していたことが考えられます。

古代：古代の遺構では、竪穴住居址や掘立柱建物址が調査区東側の斜面地で発見されました。どの竪穴住居址も床下に多くの土坑が掘られています。掘立柱建物址も竪穴住居址と接するように立てられていました。古代の遺

構は東側に集中し、西側で出土していない傾向があります。遺物の年代からこれらの遺構は 8 世紀後半から 9 世紀後半に想定することができます。

古墳～弥生時代：弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居址は、おもに西側調査区で 6 軒確認されており、分布に偏りが見られます。Y3 号竪穴住居址から出土した小銅環と Y6 号竪穴住居址から出土した鉄鑿は、希少性から特筆すべき遺物として注目されます。特に鉄鑿は柄の木質も残っており、稀な出土例です。

縄文時代：縄文時代の遺構では、竪穴住居址・集石・土坑など調査区西側に多く分布している傾向がありました。特に土坑については、縄文時代早期～前期には調査区東側に分布し、縄文時代中期では調査区西側に分布する傾向が見られました。出土遺物では、縄文時代中期の土器が多く、出土土器の 9 割以上を調査区西側で占めています。遺物を出土した主な遺構として、竪穴住居址・集石・土坑墓が上げられますが、その中でも土坑墓が注目されます。J 1 号土坑墓からは、縄文時代中期のほぼ完形の土器 4 個が発見され、型式の異なる勝坂式と阿玉台式の土器が納められていました。その中でも 1 つの阿玉台式の深鉢の中には別の小型の縄文土器が入子状に入れられていました。J 1 号集石は今回発見された集石の中でも規模が大きく、直径約 1.4m 深さ 0.95m の円形の土坑で、土坑の底面に礫が配置されており、中からは多量の炭化材が出土しました。使用された礫の総数は 760 個でした。

まとめ 今回の調査では近世・中世・古代・古墳時代・弥生時代・縄文時代の各時代にわたって利用された複合遺跡であることが確認されました。特に弥生時代の遺構は、渋田川最上流で初めての発見で、柄の木質部が残った状態で見つかった鉄鑿は貴重な発見だと言えます。調査に際しては、扇谷上杉氏の居館

跡の発見が期待されましたが、関連する時代の遺構・遺物を発見することはできませんでした。本遺跡の西に位置する御伊勢森遺跡においても、堀跡・土塁等の遺構群は確認されていません。今後の上粕屋地内での調査の進展が期待されます。

(株式会社パスコ)



調査区全景ラジヘリ撮影（南西から）



Y1~6 竪穴住居址完掘状況（北から）



C1 掘立柱建物址と C1・2・3 竪穴状遺構完掘状況（北から）



Y6 竪穴住居出土の鉄鑿

4 三ノ宮・前畑遺跡第2地点

所在地 伊勢原市三ノ宮前畑1495番地3ほか

調査期間 平成24年7月2日～7月21日

調査面積 約50㎡

遺跡の立地 本遺跡は伊勢原市中央部の西側、小田急線伊勢原駅の西へ約3.0kmの三ノ宮地区に所在し、東へ約100mに三ノ宮比々多神社が位置しています。地形的には栗原川と鈴川に挟まれた河岸丘陵上にあり、標高は約66mを測ります。

調査の成果 今回の調査では、縄文時代の土坑2基、中世の道路遺構1条、礫敷遺構1基、柱穴6本が発見されました。

縄文時代の土坑は2基を確認しました。この2基の土坑は重複し、南東側の土坑が新しく、北東側の土坑が古いと判明しました。南東側の土坑の形状は楕円形を呈し、大きさは長軸1.50m、短軸1.25m、深さ0.60mを測ります。北東側の土坑の形状は円形を呈し、大きさは径1.40m、深さ0.20mを測ります。遺物は縄文時代中期～後期の土器破片が数点検出され、北西側の土坑からは石鏃が1点出土しました。

中世の道路遺構は礫敷遺構と重複し、道路遺構が新しいと判明しました。この道路は北西から南東方向に延び、両端はさらに調査区外に延びるものと推定されます。また、南西側は現在使用されている道路により壊されています。今回の調査では、新旧2面の道路が重なった状態で検出されました。新しい段階の道路は、路面方向で約10.50m、路面幅は2.50～3.20mを測り、厚さ0.20mの固く締まった土層が堆積しています。この道路の北東側には路面方向と並行して側溝が確認され、幅は約1.00m、深さ0.20m前後を測ります。古い段階の道路は、路面方向で約10.50m、

路面幅は2.20～3.00mを測ります。この道路の下には溝状の施設と掘り込みの浅いピットが多数検出されています。遺物は新しい段階の側溝から中世のカワラケと常滑が出土しました。

礫敷遺構は東西4.20m、南北2.70mの範囲を確認することができました。この礫敷遺構の南西側は道路遺構が造られたことにより壊され、礫敷遺構の大半は北東側の調査区外におよぶものと推定されます。礫敷遺構の礫は底面に5～20cm大の礫が検出され、この礫の上にやや大型の礫が数点確認されています。遺物は礫の隙間と礫の下から中世のカワラケ、常滑、銭貨、馬歯が出土しました。

柱穴は調査区の北東側で6本確認しました。この柱穴は道路遺構の路面の下から検出され、道路遺構より古いことが判明しました。形状は楕円形と隅丸方形を呈し、規模は0.50～0.70m、深さ0.30～0.40mを測り、柱穴の配置から建物址となる可能性もあります。

まとめ 三ノ宮・前畑遺跡は2回目の調査となります。今回は西側の隣接地で面積にして2000㎡の調査が行われています。この調査では、縄文時代後期と弥生時代～古墳時代前期の集落跡、古墳時代後期の古墳が確認されています。2回目の調査は、面積50㎡と限られた範囲でしたが、縄文時代と中世の遺構が発見されました。今回発見された縄文時代の土坑は、前回の縄文時代後期の集落に伴うものと判断されます。中世の遺構は、本遺跡周辺ではじめての発見となります。道路遺構は出土遺物から中世に属すると考えられます。そして道路を覆う土層には富士山の噴火によ

て堆積した宝永火山灰（1707年降灰）が観察され、この時期には埋没したことが判明しています。礫敷遺構はわずかな調査のため、規

模や遺構の性格など不明な点を残す遺構ではありますが、北東側の調査区外に広く展開することが考えられます。

（株式会社玉川文化財研究所）



道路遺構全景（東から）



礫敷遺構全景（北東から）



道路遺構掘り方・礫敷遺構全景（東から）



道路遺構完掘全景（東から）

5 高森・宮ノ越遺跡第3地点

所在地 伊勢原市高森字宮ノ越 1280 番地の 1 外、1279 番地

調査期間 平成 22 年 8 月 20 日～11 月 13 日

調査面積 約 2,789.58 m²

遺跡の立地 小田急線愛甲石田駅の南約 800m に位置し、西側に小田急線軌道が接します。西約 200m に国道 246 号線、南東約 500m には小田原厚木道路が通ります。畑地として利用されていました。

地形的には丹沢山地から南東方向に延びる高森丘陵先端の標高 22m 程に立地しています。

本遺跡は伊勢原市 No.54 遺跡（小金塚古墳）と No.234 遺跡として知られ、過去には昭和 59 年に小金塚古墳周溝確認調査、平成 11 年に第 1 地点、平成 16 年に第 2 地点の調査が実施され、4 世紀代古墳と弥生時代中期～古墳時代前期集落跡、方形周溝墓群が確認されました。

調査の成果 縄文時代は竪穴住居址 1 軒と集石 1 基を検出しました。住居址は柄鏡形住居址と呼ばれ、通常住居址とは異なる形に造られた縄文時代中期末の住居址です。集石は焼石が詰まった穴で、主に調理に使われました。そのほか早期～後期の土器や石器が出土しました。

最も多く検出されたのは弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴住居址です。その中でも多いのは古墳前期住居址です。住居址の形は、弥生

中期は隅丸の長方形、弥生後期は円形から隅丸方形、古墳前期には隅丸方形から方形が強くなります。炉址は中央部～奥壁よりに築かれています。入口には貯蔵穴が造られています。

第 1・2 地点に続く断面 V 字状溝が検出されました。この溝は環濠と呼ばれ、弥生後期に集落防御のために築かれました。

遺物は土器が最も多く出土しました。土器には壺、甕、高坏、器台、手焙土器、ミニチュアがあります。鉄製品や勾玉なども出土しました。

中・近世は溝状遺構や土坑、柱穴が検出されました。

まとめ 今回調査は、第 1・2 地点から続く弥生時代中期～古墳時代前期集落跡を調査しました。遺跡の北側部分には、竪穴住居址が密集する大規模集落跡が存在し方形周溝墓群は築かれないことが確認されました。弥生中期に数軒で構成されていた集落跡が、後期から古墳前期には大規模集落跡に拡大する過程を捉えることができ、周辺の歴史を解明する大きな手掛かりを得ることができたと評価されます。

(株式会社盤古堂)



遺跡全景(上空より)



環濠全景(上空より)

6 高森・寺ノ下遺跡

所在地 伊勢原市高森字寺ノ下 1229 番 3、1230 番

調査期間 平成 24 年 1 月 6 日～1 月 27 日

調査面積 140 m²

遺跡の立地 小田急線愛甲石田駅の南約 800m に位置し、西側に小田急線軌道が接します。西約 200m に国道 246 号線、南東約 500m には小田原厚木道路が通ります。畑地として利用されてきました。

地形的には丹沢山地から南東方向に延びる高森丘陵先端の標高 22m 程に立地しています。

遺跡の南西側には 4 世紀末葉の円墳である小塚古墳や、高森・宮ノ越遺跡(第 1～3 地点)が隣接しています。また遺跡の目の前には金林山桑岳院と号する、浄土真宗本願寺派の「長龍寺」が建立されています。

調査の成果 調査では古墳時代前期の方形周溝墓と中・近世の切土に伴う竪穴状遺構や土坑・溝・小穴が確認されました。

古墳時代前期の方形周溝墓は調査区の外に延びていたため全容は明らかにできませんでした。S Z 01 とした方形周溝墓の西溝からは底部穿孔の壺が 1 個体出土しました。また、この S Z 01 の確認面からは、粒の大きさが 1cm を超えるよう大粒のスコリアが多く混じる黒褐色土が確認できました。

調査区の中央には中世の切土が確認され、この切土に伴って竪穴状遺構や溝が確認されました。遺物の出土がほとんどなく僅かな出土遺物から戦国期の 16 世紀頃の遺構と考えられます。この切土は、後にやや方向を変えて掘りなおされていました。この段階に伴うのは溝や土坑がありましたが、具体的な時期を示す遺物の出土はありませんでしたが近世と考えられます。

まとめ S Z 01 の確認面で確認した大粒のスコリアは、以前から県央部の古墳時代前期の遺

跡調査経験が多い研究者の間では「五領スコリア」と呼ばれ広く知られています。このスコリアが遺構の下層か中層かあるいは上層に堆積しているかで、ある程度時期を絞り込む手がかかりになると考えられてきました。最近の調査では、このスコリアは弥生時代後期後半から古墳時代前期後半にかけての時期に位置付けられる遺構から確認されることが明らかになってきました。遺構の存続期間や時期幅、遺物の出土層位と、スコリア層との厳密な層位関係の検証が重要であるといえるでしょう。

中世の切土についてはどのような人や集団が関わっているかについて興味があります。高森地区は中世には糟屋庄高森郷と呼ばれ、上杉氏の支配下にあった領主が応永 19 年(1412)大山寺に同郷を寄進した記録があります。その後、後北条氏の時代になっても大山寺の寺領とされています。これらの資料から、切土に関わる人物や集団として高森郷の領主や大山寺の可能性が推定されますが、その他にも可能性がある長龍寺も含め新資料の発見がない限り確定まではなかなか難しいといわざるを得ないでしょう。

(株式会社日本窯業史研究所)



調査区全景